

# 1980年代前半におけるテレビメディアの「マイコン」解釈 Japanese TV media Interpretation of "Microcomputer(Maicon)" in early 1980s

◎鈴木真奈

Mana SUZUKI

京都大学文学研究科 Graduate School of Letters, Kyoto University

**Abstract** It is evident from the investigation of NHK archives that many Japanese in early 1980s took the word "microcomputer" as a synonym for the word "personal computer." Although they could distinguish between microcomputers and personal computers, they thought that the personal computer was one of the most familiar microcomputers. The investigation also reveals that teenage people were considered to be center of personal computer users.

**キーワード** パソコン, マイコン, マイコンブーム, NHK

## 1. 研究背景

### (1) 動機と概要

本研究は、日本における1970年代半ばのマイコン（マイクロコンピュータ）ブームから1980年代のパソコン（パーソナルコンピュータ）ブームを一貫して捉える試みの中に位置づけられる。

パソコンが実際に動いている所を伝えられるという点で、テレビは他のメディアよりパソコンの魅力を伝えやすいメディアであった。情報処理学会歴史特別委員会による『日本のコンピュータ史』では、1980年代のコンピュータ観をNHKが報道した事例として1988年の教育テレビスペシャル「コンピューターの時代」を挙げており<sup>1</sup>、「1980年代前半まで、殆どの一般視聴者にとってコンピュータとは企業のコンピュータ室でしか見ることのない存在」[1, p. 36]と述べている。

しかし実際には、NHKは1980年代前半から継続的にパソコンについて番組を作成している。それらの番組において、パソコンはしばしば「マイコン」と呼ばれてきた。たとえば、1982年4月から教育テレビにおいて、PC-8001を用いたプログラミング講座が放映されるが、そのタイトルも「マイコン入門」である。

筆者は、「マイコン」を検索キーワードとして、NHK番組アーカイブス学術利用トライアル<sup>2</sup>によって1980年代前半にNHK総合・教育で放映された番組を56本閲覧した。結果、マイコンとパソコンは同列の存在として視聴者の前に提示されていたことが明らかになった。また、若年層のユーザーが当時注目されていたことも改めて明らかになった。1980年代のパソコンブームにおいて、若年層ユーザーが重視されていたという点は、筆者が過去にMSX専門雑誌を調査した結果からも結論できた点である[2]。

### (2) 研究対象の背景

半導体産業の発達により、1970年代から1980年代に

かけて、コンピュータの小型化・低価格化が進み、コンピュータは個人にも扱えるものになる。日本では、1976年にNECが販売したワンボードマイコンTK-80が、技術者向の製品にもかかわらずホビイストにまで売れるヒット製品となった。ただし、必ずしも購入者のすべてが使いこなしている状況ではなかったらしく、『エレクトロニクス』誌には日本のマイコンの現状に対する批判記事が掲載されている[3, 4]。

1978年には日立からMB-6880、1979年にはNECからPC-8001と、完成品のパソコンが発売されるようになり、1980年代に入って急速にパソコン市場は成長していく。

1980年代前半期においては、パソコンを指す語としてマイコンやマイクロコンピュータという語が使われることが多々あった。たとえば、文部省が1983年に実施したパソコンの教育利用に関する調査は「マイクロコンピュータの教育利用に関する調査について」という表題である[5]。

TK-80の開発者がPC-8001の開発にも携わったように[6]、当時はマイコンとパソコンの関係は密接であった。また、マイコンが話題になる際にはパソコンが話題になることも自然に起きていた。日本電子工業振興協会が主催した1982年のマイクロコンピュータショーでは、マイクロプロセッサ以上に、パソコンやパソコンソフトウェアの展示に注目が集まっていたことが、当時の雑誌報道から伺える[7]。

## 2. NHK番組アーカイブス調査概要

前述の通り、筆者はNHK番組アーカイブス学術利用トライアルに採択され、NHK大阪放送局でデジタル化された映像を閲覧した。期間は3月5日から7月11日<sup>3</sup>の間の18日間である。筆者の場合は希望する映像の年代が古いこともあり、アーカイブス内に映像が存在しない、またはデジタル化が不能であるものもあった。また、番組構成表の利用が許可されていたが、古い番組については不完全な状態であり、番組中の発言引用については基本的に筆者が書き取ったものとなる。

<sup>1</sup> 同書では1987年放映と書かれているが[1, p. 36]、NHKの番組表ヒストリーによると、1988年1月の放映である。

URL:<http://www.nhk.or.jp/chronicle/index.html>

<sup>2</sup> <http://www.nhk.or.jp/archives/academic/>

<sup>3</sup> 機器故障により延長された。

筆者が閲覧した番組の内、本論文で言及するものについてののみ、下記の表にまとめた。

表 1: 閲覧した番組 (一部)

番組名	放映年月
科学ドキュメント コンピューター大 学 マイコン革命の 旗手たち	総合 1981年11月30日
理科教室 中学校三年生 科学 の話題2 マイコン	教育 1982年3月8日
趣味講座 マイコン入門	教育 1982年4~9月 (全26回)
ルポルタージュに っぽん マイコン頭 脳買います	総合 1983年1月20日
600 こちら情報部 潜入! 秋葉原	総合 1983年1月11日
マイコン少年 大集合	1983年2月3日
ジュニア大全科	教育 1984年3月 (全5回)
マルチスコープ	総合 1984年6月 (全5回)

マイコン入門は PC-8001 の BASIC 講座である。講師は、東京大学名誉教授である森口繁一が務めた。森口は、1970 年前後から NHK でコンピュータ関連の番組に出演している。番組中で学習者としてスタジオにいるのが男子小学生、女子大学生、主婦、男性会社員であるため、視聴者として幅広い年代を推定しているものと思われる。

また、理科教室は学年別に番組作りがされた小中学生向けの教養番組、600 こちら情報部、ジュニア大全科、マルチスコープはいずれも十代向に制作された娯楽色の強い情報・教養番組である。

### 3. 調査結果

番組にゲストとして呼ばれた、あるいはインタビューを受けた出演者は、氏名・職業の紹介がある場合も匿名としている。ただし、既にマスメディアで氏名が知れ渡っている人物、専門知識を有するがゆえに取材を受けた・ゲストとして招かれたと判断できる人物については、氏名を表記している。

#### (1) マイコンの多義性

本研究調査では、パソコンをマイコンと呼称している番組を番組の表題などを手がかりにして調査したが、番組中ではしばしばマイコンという語の由来や用法を確認する場面が見られた。

マイコンは「マイクロコンピュータ」の略称であるとしばしば解説される。たとえば、「趣味講座マイコン入門」の第一回の冒頭で、講師の森口は「マイコンというのは、マイクロコンピュータの略ですね。マイ

クロとは非常に小さい、コンピュータは電子計算機です」と解説している[8]。

一方で、マイコンが「マイコンピュータ」の略称であるという解釈が存在した。マイコンピュータという語は、CQ 出版が 1981 年から 1987 年に掛けて出版していた技術者向けのマイコン誌のタイトルになっていた他、安田寿明<sup>4</sup>がブルーバックスで出版したマイコン入門書にも使われている。「理科教室中学三年生」では、カケンエレクトロ教育センターの丹羽一夫（当時）が、マイコンは「私のコンピュータ、マイコンピュータとか」マイクロコンピュータの略称である、と言っている[9]。また「600 こちら情報部」では、リポーターのジェリー・ソーレスが「(マイコンは) 本当はマイクロコンピュータって、ちっちゃいコンピュータのことをマイコンって言うんですよ。でも日本だとマイカーとか、マイホームなんて言うから、マイコン、私のコンピュータになるんでしょうけれども」と述べている[10]。

パソコンを指し示す語としてマイコンが一般に使われていたことは、「コンピューター大学 マイコン革命の旗手たち」からも分かる[11]。電気通信大学機械工学科では、PC-8001 を用いてピンポン球のピッチングマシンを制御する研究を行っていた。PC-8001 に言及する際に、男性インタビュアーは「マイコン」、男子学生は「マイクロコンピュータ」と呼んでいる。また、同科の助教授の梶谷誠（当時）も「マイクロコンピュータ」という語を使用している。

このようにマイコンとパソコンは言葉上は曖昧であったが、実物としてははっきり区別されていると読み取れる場面もあった。「ジュニア大全科」の第 1 回では、ゲストとして呼ばれた関西大学の藤沢等（当時）が、司会の浜村淳に区別を問われて、「実際には、これはなかなか区別がつかなくて、学会で揉めてるんですね」と答えている[12]。藤沢はマイコンの例として、ワンボードマイコンの実物を見せ、制御用マイコンの例をフリップで示してから、パソコンの話題に移る。そこでスタジオに置かれた PC-8801mkII が映し出され、それまで話していたマイコンとの区別がなされているのが分かる。

また、マイ・コンピュータという解釈を否定し、パソコンとマイコンの語の使用を明確に区別しようという試みも見られた。「マルチスコープ」は月曜から金曜までの 5 日間をかけてマイコンとパソコンを特集するが、第 2 回目で、司会者である榎本了壺と斉藤ゆう子が以下のようなやりとりをしている。

榎本：マイコンっていうのはさ、実は触るチャンスはあんまりないんだよね。あのね、パソコンとかそういうものは触れるけど、マイコンっていうのは機械の中に入っている一部分だから、なかなか触るチャンスは

<sup>4</sup> 調査では安田が司会を務めた『NHK 文化シリーズ 現代の科学 ブラウン管新時代』(1979)や『サラリーマンライフ パソコン私の活用法』(1982)も閲覧したが、本研究報告では触れない。

ないと思うよ。マイコンっていったらね、英語で、ほら、マイ・コンピュータみたいに、そういう感じがあるでしょう。

斉藤：あたし勘違いしてました。

榎本：だから、その、機械のセットをイメージする人も多いかもしれないけれど、実は一部分で。

斉藤：マイクロ・コンピュータなんですよ、ね。

榎本：そうなんです、小さいコンピュータだってことが、マイコンってことなんだよね。[13]

しかし、このようなやり取りがあっても尚、「マルチスコープ」の特集内でも、パソコンに相当するコンピュータをマイコンと呼ぶ場面は見られる。特に第5回では、榎本が「マイコン」と発言したものを「パソコン」と言い直す場面が存在した[14]。

現在で言うマイクロコントローラの用途に近いマイコンとパソコンの区別はあるものの、マイコンという語がパソコンを指し示すものとしてごく普通に使われていたことは改めて明らかになった。

## (2) マイコンユーザーとしての小中学生

1984年の『日経コンピュータ』では、購入者カードの推計から、初代MSX5ユーザーの7割近くは十代であると推定している[2, pp.123-124]。若年層がマイコンブームを支える存在と見なされていたことは、本研究調査で閲覧した番組にも表れている。

たとえば、「ジュニア大全科」のマイコン特集の第1回目の冒頭で、司会の浜村が「一昔前の子供たちに何が欲しいと聞いたら、たいがい答えはラジカセやっただけです。今は違います、誕生祝いにパソコン、入学祝いにパソコン<sup>5</sup>」と、当時の子供の関心の高さを窺わせるコメントをしている[12]。

また、マイコンショップを訪れる客<sup>6</sup>取材した映像でも、小中学生に積極的にインタビューが持ちかけられる。

「趣味講座マイコン入門」第5回では、秋葉原のマイコンショップの取材映像が流れる。ナレーションによれば、当時一日に約100名ほどの小中学生が訪れているという。自分のプログラムを検証する男子中学生や、8インチディスクを持ち込み市販のゲームを楽しむ男子中学生などが紹介された[15]。

「600こちら情報部」で秋葉原が特集された際には、日曜日に開店前のマイコンショップに十名以上もの人々が並ぶ様子を映し出し、ある小学五年生男子は開店直後から六時過ぎまでパソコンを利用していたとナ

レーションは説明する[10]。

小中学生のマイコンブームの中核にはビデオゲームの存在があった。「理科教室中学三年生」は、男子高校生が自作のゲームを遊ぶところから映像が始まっている[9]。「600こちら情報部」で取材を受けた中学二年生男子がマイコンショップを訪れる理由は、自作のゲームプログラムを検証するためであった[10]。

若年層がゲームに取り込まれていたことを象徴するようなドキュメンタリーが「ルポルタージュにっぽんマイコン頭脳買います」である[17]。中学二年生と大学一年生の男性二名がマイコンショップにゲームを売る様子や、ゲームプログラムコンテスト<sup>7</sup>に挑戦する小学四年生男子などが取材されている。さらに、ゲーム会社のエニックス（当時）では目ぼしいゲームプログラマーに電話を直接かけ、社長の福嶋康博（当時）が中学生と直接面談して交渉する場面も見られる。

「ゲームを遊ぶだけでなく、作ってみてはどうか」というメッセージは、教育者の側からも発せられていた。「マルチスコープ」第5回は、竹園東小学校、富山大学付属養護学校、神奈川県立座間高等学校でのパソコン利用例を取り上げている。座間高校のマイコンクラブ顧問（男性の理科担当教員）は、生徒のパソコン利用について、のめりこんで勉強がおろそかになる生徒がいることを認めつつ、ゲームでよいのでプログラミングする経験を持つことが重要であると述べる[14]。

「ジュニア大全科」第5回では、ゲストと呼ばれた京都大学の長尾真（当時）が、番組最後に視聴者のアドバイスとして「ゲームで遊んでるだけじゃなくて（中略）自分で面白いゲームを作るといふこと」に言及している[18]。

さらに「600こちら情報部」では、小中学生をスタジオにゲストとして呼び、彼らの自作のゲームを番組内で紹介した。また、小学五年生男子が、司会の鹿野浩四郎に対して、数当てゲーム<sup>8</sup>をBASICでプログラミングする方法を教える様子を見せている[19]。

以上をまとめると、1980年代前半において、若い男性はパソコンユーザーの中心的存在であり<sup>9</sup>、彼らがパソコンに熱中し、ゲームを楽しんでいる様子は繰り返し報じられた。彼らはまた、ゲーム産業にも影響を及ぼすほどの存在であった。ゲームを遊ぶだけという受動的な態度からの脱却として、ゲームをプログラミングすることは教育者からも肯定的に見られていた。

<sup>5</sup> 浜村はここで「パソコン」という語を用いているが、この後にゲストの藤沢に対してマイコンとパソコンの区別を問う質問をする。前節参照のこと。

<sup>6</sup> パソコンを購入せずに使用方法として、マイコンショップの展示物を使うことは一般に許容されていた。「趣味講座マイコン入門」第13回では、司会の須磨佳津江が、電気屋やマイコンショップに対して、希望する客が来たら是非パソコンに触らせて欲しいと呼びかける場面もある[16]。

<sup>7</sup> エニックスが主催した第1回ゲームホビープログラムコンテスト。

<sup>8</sup> プログラムで生成した乱数を当てるゲーム。使用する命令が少なくプログラミング初心者向け。

<sup>9</sup> 女性のマイコンユーザーについては、日本マイコンクラブの白田由香利（当時）が『ブラウン管新時代』（1979）や『ジュニア文化シリーズサイエンスレーダー』（1981）に出演しているのを確認している。一方で、父親と同伴でマイコンショップに来た小学校四年生女子を見て、リポーターのソーレスが「珍しい」とコメントしている[10]。

#### 4. 総括

NHK 番組アーカイブスからは、1980 年代前半のマイコンブームやパソコンについて、大変広範な知見が得られているが、本研究報告ではその中でもマイコンの語の使用と若年層ユーザーに着目した。

マイコンがパソコンを指し示す言葉として使われていたことは、「趣味講座マイコン入門」という番組タイトルの他、インタビューのほか、司会やゲストの言葉づかいにも表れている。特に、マイコンとパソコンの呼び分けを意識するかのような発言をした司会者が、パソコンをマイコンと口走る映像を発見できたことは大きい。両者の意味内容は区別されていたが、パソコンをマイコンと呼ぶことはごく自然なことであった。

若年層ユーザーの重要性はパソコン雑誌の調査からも読み取れたことだが、本研究調査では、マイコンショップの様子を映像で閲覧できた他、ソフトウェア産業界の反応、教育界の反応を見ることができた。雑誌・テレビという二つのメディアの調査結果を合わせて評価することにより、マイコン（パソコン）文化の担い手として若年層が重要な存在であったと結論づけることはできるだろう。

#### 5. 謝辞

本研究発表は、公益財団法人中山隼雄科学技術文化財団平成 27 年度助成研究 A-2「日本のホームエレクトロニクス思想とビデオゲーム」の助成を受けたものである。また、NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル 2016 年第 1 回「1980 年代前半期のマイコン・パソコン文化形成にメディアが果たした役割」による調査研究である。調査期間中、NHK 大阪放送局、NHK アーカイブスの職員の皆様方にご助力いただいたことを深く御礼申し上げる。

#### 参考文献

- 1) 情報処理学会歴史特別委員会（編）(2010). 『日本のコンピュータ史』, オーム社.
- 2) 鈴木真奈(2015). 「1980 年代のコンピュータ専門誌報道に見るホームコンピュータのホビーユースの概況」, 『科学哲学科学史研究』9, pp.115-127.
- 3) 石田晴久(1977). 「間違いだらけのマイコン・ブーム」, 『エレクトロニクス '77 7月号』オーム社, pp.50-55
- 4) 石田晴久, 石田芳, 鎌田信夫, 矢田光治(1977). 「座談会 おかしなおかしなマイコン・ブーム」, 『エレクトロニクス '77 9月号』オーム社, pp.853-861
- 5) 文部省(1983). 「マイクロコンピュータの教育利用に関する調査について」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/t19830610001/t19830610.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19830610001/t19830610.html)
- 6) 富田倫生(1995). 「パソコン創世記」  
<http://www.aozora.gr.jp/cards/000055/card365.html>
- 7) 電波新聞社(1982). 「マイクロコンピュータショウ'82」, 『マイコン'82 7月号』, 電波新聞社 pp.219-227
- 8) NHK 教育(1982). 「趣味講座 マイコン入門 第一回 マイコンとの対面」, 1982 年 4 月 7 日放映

- 9) NHK 教育(1982). 「理科教室中学校三年生 科学の話題 2 マイコン」, 1982 年 3 月 8 日放映
- 10) NHK 総合(1983). 「600 こちら情報部 潜入! マイコン基地 ザ・秋葉原」, 1983 年 1 月 11 日放映
- 11) NHK 総合(1984). 「科学ドキュメント コンピューター大学 マイコン革命の旗手たち」, 1981 年 11 月 30 日放映
- 12) NHK 教育(1984). 「ジュニア大全科 コレがマイコンだ! (1) コンピューター連結作戦」, 1984 年 3 月 5 日放映
- 13) NHK 総合(1984). 「マルチスコープ マイコン何でも活用」, 1984 年 6 月 12 日放映
- 14) NHK 総合(1984). 「マルチスコープ マイコンと勉強は両立するか?」, 1984 年 6 月 15 日放映
- 15) NHK 教育(1982). 「趣味講座 マイコン入門 第五回 自動販売機の算術」, 1982 年 5 月 5 日放映
- 16) NHK 教育(1982). 「趣味講座 マイコン入門 第十三回 BASIC のまとめ(1)」, 1982 年 6 月 30 日放映
- 17) NHK 総合(1983). 「ルポルタージュにつぼん マイコン頭脳買います」, 1983 年 1 月 20 日放映
- 18) NHK 教育(1984). 「ジュニア大全科 コレがマイコンだ! (5) コンピューターが知能を持つ?」, 1984 年 3 月 9 日放映
- 19) NHK 総合(1983). 「600 こちら情報部 マイコン少年大集合」, 1983 年 2 月 3 日放映